

第63回岩手県水産審議会 会議録

日時 令和6年3月6日(水) 14:00~15:30

場所 岩手県水産会館5階 大会議室

開会・成立確認

平嶋
特命課長
(進行)

定刻となりましたので、ただ今から、第63回岩手県水産審議会を開催いたします。事務局を担当しております、農林水産部水産振興課特命課長の平嶋でございます。暫時、司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

委員の皆様には、御多忙のところ御出席をいただき、誠にありがとうございます。

本日は、委員20名のうち12名の御出席をいただいております。半数以上の委員に御出席をいただきましたことから、岩手県附属機関条例第6条第2項の規定により、会議が成立しておりますことを、御報告いたします。

なお、北里大学海洋生命科学部専任講師の阿見彌典子委員、国立研究開発法人水産研究・教育機構水産技術研究所企画調整部門特任部長の齊藤肇委員、北海学園大学経済学部教授の濱田武士委員の3名におかれましては、リモート出席となっております。

それでは、開会にあたりまして、岩手県農林水産部長の藤代克彦より、御挨拶を申し上げます。

挨拶

藤代
農林水産部長

第63回岩手県水産審議会の開催に当たり、御挨拶を申し上げます。

初めにごさいますけれど、能登半島地震で大きな被害が出てございます。

岩手県では、岩手県応援本部を設置し、農林水産分野では、水産土木、農業土木、そして、今月からは林業関係の職員を被害状況調査や災害復旧の応援というような形で、派遣しているところでございます。

引き続き、東日本大震災で学んだ教訓などを生かしながら、被災地を支援していくこととしてございます。

本日は、御多用のところ、岩手県水産審議会に御出席いただき、大変ありがとうございます。また、日頃から本県水産業の振興に、格段のご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

後ほど、改めて、御紹介をさせていただきますけれども、岩手県水産加工業協同組合連合会の高橋会長様に委員に就任いただきました。また、本日、欠席されていますけれども、JF岩手漁青連の及川会長様、農林中央金庫仙台支店の桑野支店長様にも就任いただいております。これから、よろしくお願いいたします。

最近の水産業の情勢でございますが、秋サケについて、1月末現在の漁獲量は、約130トンということで、対前年比30%、金額ベースでは37%と、今年もなかなか難しい状況が続いております。

サケの種卵につきましては、昨年度と同様に、大井会長の御協力をいただき、北海道から、目標の約7割を確保しまして、現在、県内の各ふ化場で、大型で強靱な稚魚となるよう取り組んでいるところでございます。

また、新聞報道等で皆さん御承知のことかと思いますが、アルプス処理水の海洋放出の影響により、県の漁業団体の皆様方からは、アワビの10キログラム当たりの事前入札価格が、前年に比べて約4割低下、ナマコについても約3割低下したと伺っております。現在、県漁連が事務局となっております、損害賠償対策協議会におきまして、東京電力に対して賠償交渉が進められているところでございます。

県では、国、東京電力に対しまして、漁業者の方々が安心して事業を継続できるよう対応することや、被害の実態に即して、迅速かつ確実に賠償を行うことなどを要望しているところでございます。

また、今週の日曜日、香港のテレビ局が岩手に取材に参りまして、アルプス処理水の風評被害対策ということもあるのですが、岩手の水産物は安全だ、そして、美味しいというようなことを、香港の方でアピールするということで、香港の大使も一緒に宮古の毛ガニまつりにいらっしゃいました。宮古の毛ガニや岩手のカキが非常に人気ということで、香港の方に輸出されているそうですけれども、そういったカキの美味しさや瓶ドンですとか、こういったものをかなり取材されており、アピールしていただけるというような取り組みをされているところでございます。

県としては、漁業関係団体と、「水産業リボーン宣言」に基づきまして、サケ等の主要魚種の資源回復、増加している資源の有効利用、海面養殖などの新たな漁業・養殖業の取組を、引き続き、進めて参りたいと考えてございますので、皆様の御支援をお願い申し上げます。

本日の審議会では、本県における海洋環境の変化の影響、水産業リボーン宣言に基づく取組の状況、令和6年度水産関係予算案について、御説明をさせていただくこととしてございます。

限られた時間にはなりますが、忌憚のない御意見、御提言をお願い申し上げまして、開会にあたっての御挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

議事 副会長の選出について

大井 誠治
委員 (会長)

それでは、議事に入らせていただきます。
議事の「副会長の選出について」を議題といたします。
佐々木公一副会長の委員の辞任により、副会長を選出いたします。
副会長は、委員の互選によることとなっておりますが、いかが致しましょうか。

佐井 守
委員

副会長の選出は、会長に一任してはいかがでしょうか。

大井 誠治
委員 (会長)

只今、会長に一任という御意見がございましたが、いかがでしょうか。

委員一同

異議なし。

大井 誠治
委員 (会長)

それでは、異議がないようですので、副会長については、佐々木淳委員にお願いしたいと思います。

報告 本県における海洋環境の変動とその影響について 岩手県水産業リボーン宣言の取組について 令和6年度水産関係予算 (案) について

大井 誠治
委員 (会長)

それでは、議事を進めさせていただきます。
今後の議事の進め方ですが、議題に関する資料1から資料3までの説明が全て終了した後、委員から御意見等をいただく流れとしたいと思います。
まず、「本県における海洋環境の変動とその影響」について、事務局から説明をお願いします。

太田
漁業調整課長

(資料1を説明)

野澤

(資料2を説明)

振興担当課長	
太田 漁業調整課長	(資料3を説明)
佐藤 漁港課長	(資料3を説明)
大井 誠治 委員 (会長)	<p>ただ今、事務局から説明がありました、資料1から資料3までについて、せっかくの機会ですので、出席委員の皆様からコメントをいただきたいと思います。</p> <p>まず、会場の委員からですが、席順にお願いいたします。</p> <p>なお、御質問については、各委員の皆様からのコメントが全て終了した後、一括して事務局から回答させていただきます。</p>
袁 春紅 委員	<p>御説明ありがとうございます。岩手大学の袁春紅と申します。</p> <p>岩手県だけではなく、日本全体および世界隔離で地球温暖化の影響が進行している中、魚種の変化や交代など、様々な現象が生じています。岩手県でも、魚種の漁獲量が大きく変動しており、現在、各地での養殖事業が推進されています。</p> <p>私の研究に関連する分野ですが、水産業振興において、高鮮度の流通、すなわちサプライチェーンの視点から、実証実験などへの予算を増やすことが重要だと考えます。例えば、増加している資源を有効に活用するために、高鮮度の流通事業や実証実験に支援を充てるなど、そのようなプロジェクトに助成金を提供することが望ましいと思います。</p> <p>さらに、もう1つの重要な点として、最近注目されているSDGs（持続可能な開発目標）と食品ロスの削減、そして岩手県の水産業の強みが海外への輸出にどのように貢献できるかを考えることがあります。例えば、親潮と黒潮がぶつかり合う特殊な海洋環境を活かした海面養殖や蓄養を活用し、三陸産水産物の高鮮度・高品質のサプライチェーンを構築することが、重要な課題の1つであると考えています。</p> <p>具体的な例として、前述のように、米崎で生産されるカキが豊洲市場で高い評価を受けています。また、ホタテも岩手県が持つ資源の価値を高め、品質を向上させることで市場での評価を高めていくことが重要です。鮮度保持の分野においても、これらの取組は重要であると考えられます。</p>
阿部 知彦 委員	<p>御説明ありがとうございました。</p> <p>サケをはじめとする主要魚種の漁獲量の減少が、いかに深刻であるかという部分も含め、暖水系の魚種が増えているという変動について具体的にわかりました。</p> <p>新年度予算につきましても、限られた中で、工夫して計上されているという印象を受けました。</p> <p>気候変動に伴う海洋環境の変化は、なかなか歯止めをかけることが難しい問題ではありますが、このような中で、水産業界リボーン宣言に基づき、漁業者の方々、そして官民の関係機関が、一体的に取組を進め、着実に工夫しておられるということについては、心強く感じます。</p> <p>原発処理水の放出なども含め、県民生活と密接に関わる水産業の課題ですので、これを幅広く共有していくことが何より重要だと思っておりますし、そのためには、やはり、情報発信が大切なのだろうということを再認識しております。</p> <p>私たち報道機関は、そうした役割をしっかりと共有しながら果たしていきたいと思っております。</p>
岩船 良子 委員	<p>三陸の宮古で小売の魚屋をしています。</p> <p>私からは、こういった海の状況を受けた最近の水産の商売の状況を少しお話しさせていただきます。</p> <p>この1年、我々魚屋にとっては、とても厳しい1年だったと思います。サケ、サンマといった主だった魚が取れないのはもちろんのこと、昨今の物価高騰による家計の圧迫</p>

	<p>が、目に見えてお客様の消費に繋がった1年でした。</p> <p>当店は、宮古の中心地にある宮古市魚菜市场という共同市場の中に店舗を構えているのですが、当市場、昨年12月の来場者数は、一昨年を上回り、増加しているにもかかわらず、お客様1人当たりの消費額が減少しており、皆様がお財布の紐を固くしたという結果が出ております。これは、コロナ禍の時よりも深刻な不況であり、魚が取れない、海水温上昇に伴う貝類の出荷停止といった負のニュースと合わさり、苦しい状況となっております。</p> <p>私たち小売の魚屋の目標としては、魚食文化の衰退を防いでいきたいというのは常にございます。新巻鮭、サンマ、毛ガニ、ウニといった魚介類は、全国的にも高い人気を誇っておりますが、サケの不漁やサンマの小型化、ウニ、毛ガニの原価の高騰により、低迷しているというのが現状です。</p> <p>その一方で、宮古では瓶ドンが発売されたり、各地域の養殖サーモンが普及されたり、地域、漁協の努力で誕生した新たな特産物がございます。私たち小売の魚屋は、誕生した商品を高めて広めてヒットさせる。新たな魚食文化の定着には、いつも挑戦していかねばならないと思っております。</p> <p>また、安定的に魚がとれるという安心感は、どの魚介類に関してもなくなりましたので、三陸の魚という大きな括りで、三陸の魚を毎日の食卓にということ強くアピールしていくことが必要だと思っております。</p> <p>私も日々、水産業について小売の観点から様々なことを考えておりますが、やはり漁師さんあっての水産業ですので、行政の方には、漁師の育成、また、補助といったところを今後とも押し進めていただきますようお願いしたいところです。</p>
<p>木村 千種 委員</p>	<p>今、岩船委員からお話を伺い、全くその通りだと思っております。</p> <p>現在の水産業の状況を見ると、我々の食の文化というのは、ガラッと変わってきてしまう。例えば、鮭のあら汁とか、そういうものはもう幻のものになるのではないかと危惧を抱いております。</p> <p>現在、魚は全然取れない。そういう中で、山田町はカキの養殖が盛んであります。今年の成長具合を見ますと、非常に質のいい物が取れていると思います。これも漁家、漁師の方々の努力の賜物だと私は考えます。</p> <p>私の知っている若い漁師さんたちは、津波の後、大変な努力をして、現在もカキの養殖に取り組んでいます。彼らが意欲的に、この水産業、海と向かい合い取り組めるような状況をぜひ構築していただきたい。</p> <p>そしてやはり、経営の安定化、それが一番です。</p>
<p>佐井 守 委員</p>	<p>内水面漁連の佐井でございます。</p> <p>海水温の上昇や漁獲量の減少、本当に深刻な問題だと捉えております。</p> <p>内水面においても、川の水温が上がり、魚種、漁獲量が減っております。</p> <p>沿岸だけではなく、内水面の方でもできることがあれば、研究なり、皆さんと協力していきたいと思っております。皆で頑張りましょう。</p>
<p>佐々木 淳 委員</p>	<p>海洋環境の変化によって、魚種が変化し、定置網でも取れる魚が変わってきている中ですが、養殖業の方も、高水温に耐えられず死滅が増え、ほぼ全滅に近い養殖漁業者が出てきているという状況です。</p> <p>地球規模の環境変化が今後、どのように変わっていくかは分かりませんが、漁業離れに少しでも歯止めをかけなければならないと考えておりますので、例えば、新規養殖種に転換する方や、漁の仕方に係る経費とかを助成する取組も視野に入れていただきたいなと思っております。</p> <p>とにかく、漁師離れを防ぐために、とりあえず生かすという、取組、支援策、助成をお願いしたいなと思うところです。</p>
<p>椎屋 百代</p>	<p>山田町でスーパー2店舗を展開しております。びはん株式会社の椎屋と申します。</p>

委員

親会社は大船渡のマイヤでございますので、岩手県内のスーパーであればどちらかといえば、水産業に強いスーパーだと思っております。

アルプス処理水の関連では、三陸常磐キャンペーンにて、月1で三陸の魚を食べようと企画し、一緒に取り組んでおりますけれど、やはり、時代の流れなのか、魚離れを肌で感じております。

例えば、朝に市場から仕入れた魚は、昔であればどんどん売れておりましたが、今は家で捌ける方がだんだん少なくなってきております。やはり、おろしたものや、加工処理した関連の商品が出てきているというのが現状でございます。

できるところであれば、一般の方に向けた捌き方教室など、一般の消費者向けに色々実施し、岩手の魚を食べていただくという取組をしていかなければと感じております。

岩手の水産物のPRや出荷はもちろん大事かと思いますが、地産地消というところで、岩手の魚を岩手で食べるということが、さらに大事になってくるのかなと、肌で感じていところでございます。こういった取組を、コロナ前には、1年に1回だけですけども、やらせていただいております、コロナも明け、色々イベントができるようになってきましたので、試食であったり、魚の捌き方であったり、もっと身近に魚を感じていただけるように、私達も努力していきたいと思っております。

高橋 篤
委員

岩手加工連の高橋と申します。よろしく申し上げます。

資料1の本県における海洋環境の変動、海流の変化ということで、海水温の上昇に伴い、具体的に気になっているところでは、栄養塩の減少等にも多少影響があるのかなと思っております。過去30年から50年の間に大きく変動した時期は、ネット上でも確認できますが、岩手に関しても同様のことが起きているのであれば、今の状態のまま、色々新しい魚種を増やすなどをして、物になるものなのかと。栄養塩の減少に関しての原因を突き止めた上での改善策は、是非とも何かしら手を加えなければいけないかなと思っております。

やはり、一企業、一団体での取組だけでは何もできないため、様子を見て、お天気任せにしているのが実際のところなんです。

県の水産技術センターに調査研究等、色々進めていただいておりますが、資料を見ても、今後の対策や改善方法に関しては、明確に書かれていない部分も多く、こういったところまで分析することにより、生態系の基本となる植物プランクトン、動物プランクトン、それを食べる稚魚等が増え、少しずつでも生産量の改善が期待されるのではないかと思います。

大井 誠治
委員 (会長)

次に、リモート出席の委員から申し上げます。

阿見彌 典子
委員

御説明ありがとうございました。

近年の海洋環境の状況から、つくり育てることに力を入れることは非常に重要だと感じました。

その上で、資料3の7ページの高水温耐性の研究というのは、非常に重要と感じたのですが、これは、新たな対象種を探すほかに、現在養殖しているギンザケやトラウトに関しては、調べられた結果をどのように盛り込んで取り入れて生かしていくのか。資料からは、種苗開発への応用に繋げるのかと読みとったのですが、それ以外にも何かお考えがあればお伺いしたいです。

齊藤 肇
委員

岩手県の水産のニュースについては注視しております。

昨年度、私からは、海洋環境の変化や魚種の構成の変化に鑑みて、粘る取組と、新しい環境に適応していくための乗り移る取組、この両方が必要であると申し上げました。この考え方に、現在も変化はありませんで、来年度の予算を見ましても、その両方の視点に目配りを行った事業予算の配置になっているように見えます。

もう少し詳しい話をさせていただきますと、粘る取組として、例えば、大型で遊泳力の高い強靱なサケ稚魚の生産技術の開発が代表的なものとしてあげられるかと思っております。

が、これは、賭けみたいなところもあると思われます。大型で遊泳力の高い強靱なサケ稚魚ができたとしても、それを放流したときに、4年後に必ずしもサケが帰ってくるかどうかは、実証データがまだないわけで、一か八かということになるかと思います。

投機性の強い取組については、県民の皆様、あとは、漁業者の皆様への応援あってこそのもかかと思しますので、「一か八かであっても、ぜひ県の方でやってくれ、予算を付けてくれ」と言ってもらえるような取組にしていく必要があるかと思えます。

他方ですね、乗り移る取組については、魚種組成の変化のデータで示していただきましたように、マイワシやサバ、ブリが増えているということですが、ブリは、養殖ブリがライバルになってしまいます。養殖ブリは、品質が非常に均一で安定していて、とても美味しいものだと思います。天然のブリというのは、全体としては品質のばらつきが大きいので、これについて、どこまで取り組んでいくか、養殖ブリを意識しながら取組を決めていかなければならないと思っております。

あと、量的にはマイワシとサバが多いのですが、それらに如何に付加価値をつけ、儲かる生産物にしていくかが重要だろうと思えます。

もちろんマイワシにしてもサバにしても、魚自体の単価が低い魚ですので、何とか付加価値をつけ、岩手県にお金が入るようにしていかなければならないなど。そう考えた時に、新たな企業を取り込むためには、漁船が今どれくらいあるか、漁港の造りは馴染んでいるか、加工流通の基盤であるインフラは、何か改良する必要性はないかという観点から、対応が様々必要になってくるかと思えます。漁港部門の予算の中で、魚種の変化を見据えた漁港施設、周辺施設の対応といった視点があるのかをお伺いできれば幸いです。

濱田 武士
委員

北海学園大学経済学部の濱田でございます。

私からは、全体を通しての部分と、個人的なお伝えをさせていただきます。

行政サイドが施策の方針とし掲げるものとしては、今回、報告していただいたものは違和感ありません。やはり、環境変動が大きくなっている中で、種苗の対策や新養殖への対策について、このような形で施策を組むのは、その通りだろうと思えます。

ただ、岩手県だけに限らない問題ですが、全体的に事業者や事業承継する方々が減っていく、あるいは、就業者が減っていく。これからそれが加速していく中で、考えていかななくてはいけないことは、少ない頭数で経済を維持するために、しっかりと生産性を上げるといふ発想が必要になってきます。今までのやり方が通じなくなってくるころがたくさん出てきて、それを改良していくには、これまでやってきたところではもう限界が来るということをお早めに発見することと、問題点を解決するために、いかにその合理的な方法に変えていくかということかと思えます。

例えば、漁業経営や養殖経営で、個別だと限界があるところは、極力、仲間とか関係者と一緒にやっていくとか。大きな話で言えば、この話は言いにくい部分もあるのですが、やはり流通のことを考えると、集荷するのはある程度拠点化していくということが、経済原理としては重要な過程だと思えます。極力1ヶ所に多くの物が集まった方が、そこに買い付ける人もたくさんおり、シーズとニーズを合わせ、適正な価格が形成されるという意味では、より拠点化を進めるということが重要になってくると思えます。値上げするのは今までどおりでいいとは思いますが、やはり、取引をする場所は、物が集まることが需要に一番発揮されますので、この点を考えなくてはいけないかなと思えます。

物流の面から見ても、2024年問題が目の前に迫り、トラック等をこれまでどおり走らせる訳にはいかないという問題もありますので、共同配送など、色々な工夫が必要になってきます。これから人が減っていく中、漁船も減っていく中で、どのような市場の配置にするかなど、市場のあり方を真面目に考えていかなければならないかと思えます。

それと、地域経済の対策としては、魚を売っていく流通加工業者の方々が稼がないと、地元業者にも経済が回っていかなくなりますので、三陸ブランド、岩手ブランド、それぞれの地域のブランド、あるいは、その人たちのサービス力といった、より地元の水産流通加工業者が活躍してもらうような環境づくりといったものが、これまで以上に必要だと思っております。これは、どちらかといえば町村単位の課題かと思えますが、そこは県としても意識していただきたいと思えます。

これらの内容は、当然行政サイドが牽引するものではありませんので、漁業者団体、あるいは水産加工団体、県の団体、民間などが一丸となって、問題の発見と改善策、少ない人でもやっていけるような合理性の追求など、生産性を高め、さらに、需要に応じた水産物供給体制を作っていただきたいと思います。

大井 誠治
委員（会長）

御意見ありがとうございます。

魚を取る方と、それを販売する業者がおります。かつてないほどの原料不足により、両者とも大変困っております。色々工夫をしておりましたが、これらが現状であり、正直、何ともできず難しいところです。

岩手県の定置も全く数字が伸びないもので困っております。どうしたらいいかと、考えておりますけれど、それ以上に皆さんも困っていることかと思います。

出席委員の皆様から、様々な御意見をいただきました。

これにつきまして、事務局の方から回答をお願いします。

野澤
振興担当課長

御質問ありがとうございます。

それでは順次、御説明をさせていただきたいと思います。

まず、袁委員からの御質問にありました、サプライチェーン、物流、そういった部分に関する予算のお話でございます。こちらにつきましては、来年度の予算に載せております、新たな水産資源利活用モデル開発事業において、たくさん取れている資源の有効利用のための物流モデルや新商品開発、それらの試行的な取組ということで、約1000万、前年比3割アップの増強をし、取り組む予定としております。

その他、サプライチェーン、新商品開発につきましては、水産業復興販売加速化支援事業という国の補助事業がございますので、これらも含め、県の方でサポートしていきたいと考えております。

それと、三陸の地形を生かした取組というお話もございました。こちらにつきましては委員おっしゃるとおり、三陸のリアス式海岸の地の利を生かした、養殖振興が大事だというふうに考えております。海洋環境の変化により高水温化しておりますので、従前の養殖に加え、高水温耐性に強い新たな養殖種の探索もしていかなければならないと考えております。こちらの方は、来年度の養殖業の振興事業費において、予算を増強して取り組む所存でございます。

佐々木委員から御意見のありました、新規就業者の方々が新たな漁業・養殖業に取組際の支援でございますが、こちらにつきましては、現在、国のがんばる養殖復興支援事業というものがございます。新たな養殖に取り組む漁業者や、養殖種を変え展開したいというような漁業者の方々に対し支援するものでございますが、高率の補助制度となっております。現在、広田湾の水産アカデミーを卒業した方が、カキをやりたいという話があり、初動の支援を我々の方でもサポートしているところでございます。国の事業も一緒に活用しながら、生産増大に向けた取組を支援していきたいと考えております。

阿見彌委員から高水温耐性のお話もございました。こちらにつきましては、さけ、まず海面養殖イノベーション推進事業費と養殖業振興事業費で予算を強化しており、サケ・マス類の海面養殖については、新たに高水温耐性を有する対象種の調査ということで、既存の海面養殖用の主要種苗が高水温下でどのような生産体制が組めるかを調べ、高水温下における養殖種苗生産の技術開発のため、基礎資料を積み上げることを目的とした取り組みでございます。養殖につきましても、ホタテやエゾイシカゲ貝、冷水性の二枚貝は重要な養殖種でございますが、海洋環境の変化による高水温化でも耐性があり、育成していけるような養殖種を探索するといったところも、県としては取り組んでいきたいと考えております。例えば、今、アサリに取り組もうとしておりますが、それ以外にも南の方の取組も色々参考にしながら、新たな養殖種を探索するための予算も計上しております。

齊藤委員の方からは、サケの強靱化のお話もございました。サケの産業は、加工流通、小売屋など、関係する業種が広く重要な産業であり、いろいろな関係事業者が関わってくる魚種になります。やはり、サケの資源回復を望む声が、市町村、漁業団体からも強くあり、県でも国に強く働きかけをしております。国からもしっかりと支援をいただい

ているところでございますので、引き続き、資源回復に向けた様々な取組を積極的に進めていきたいと考えております。

それと、ブリのお話もございました。品質のバラつきや新たな魚種の付加価値向上でございますが、やはり、養殖と違って脂の乗りも悪く、品質も安定しないというのはそのとおりでございます。取れている資源をしっかりと有効に使用し、付加価値を高めていくというところで、加工業者、小売りの皆様方とも連携をしながら、少しでも安価で、付加価値の高いものを流通させていけるような取組を進めていきたいと考えております。来年度も引き続き、新たな水産資源利活用モデル開発事業において、いろいろ試行的に取り組んでいきたいと思っております。

佐藤
漁港課長

齊藤委員からお話もございました、魚種変化に伴う漁港の整備に関しまして、資料3の事業番号25番に水産流通基盤整備事業がございます。大船渡市の大船渡漁港に底曳き等の大型漁船が入港してきており、マイワシ等の水揚げが増えているというような状況の中で、現在、大水深岸壁の新設などにより、大型漁船に対応した魚市場の整備を進めているところでございます。

委員がおっしゃったとおり、今後の魚種変化などを見極めながら、漁業者等と連携し、魚種変更に対応した漁港整備を進めていきたいと考えているところでございます。

太田
漁業調整課長

岩船委員と椎屋委員からお話がありました、魚食文化や食育、地産地消でございますが、こちらにつきましては、コロナ禍前、サケが取れる時期になると、各振興局の普及員が、鮭の日学校給食や地域の水産教室で、新巻鮭作り体験やイクラ作りなどを行ってございました。最近はなかなか実施できない状況になっていたのですが、折を見て、取組を進めていければと思っております。一部の振興局では、地域経営推進費を使用し、それぞれ地域の特産で出ている水産物を地元でもっと食べてもらうような取り組み等も行ってございます。また、サケ・マス類の海面養殖魚についても、県内のスーパーでPRを実施しており、これからも継続して進めていきたいと考えております。

高橋委員から、資料1の4ページにあります海洋環境の変動についてという部分で、栄養塩の御質問等がございました。栄養塩は、親潮が下りてくるような冷たい水の地域でありますと、豊富な状況であったのですが、これが最近、親潮が下りてくる範囲が久慈沖ぐらいまで後退しております。逆に、栄養塩等があまりなく、水温の高い黒潮系の水が北上しているということで、これらの影響はあると思っております。

特に、栄養塩が必要になる海藻類の養殖や、磯焼け等も含め、何かしらの影響が出てきているとは思いますが、人の努力で変わるところと、変わらないところがあるため、抜本的な解決策を人為的に行うというのは難しい状況かと思っております。

県の水産技術センターでも、現在の状況については事象として捉えておりますので、神所長から、センターの取組について御説明させていただきたいと思っております。

神
水産技術セン
ター所長

水産技術センターの神と申します。

太田課長から説明がありました、栄養塩のことでございますけれども、親潮が持つてくる、運んでくれる栄養塩と深い方にある栄養塩があります。海水が深い方と浅い方と混ざり合いますと、栄養塩は上がってきます。

海藻養殖においては栄養塩だけではなく、水温がかなり影響しておりまして、特にその水温の上昇が、ワカメ・コンブの養殖に大きく影響しております。今年度は水温が高くて、ワカメの巻き込み時期が遅くなったということがございました。その対応としまして、半フリー種苗という、人工的に種を取り、一般のワカメ養殖の沖出しより少し遅い時期に種を巻き込んで、早く育つというような種苗の供給等を行っております。

またコンブにつきましても、高水温対策として母藻の成熟を人為的に早めて、種を取るような技術開発をしております。

抗うことはできない部分でありますので、そこは環境変化に柔軟に対応し、試験・研究開発を行い、随時現場で普及させていきたいと考えております。

齊藤委員からの御意見にもお答えしたいと思っております。

<p>大井 誠治 委員（会長）</p>	<p>乗り移ることへの対策ということでお話がございました。現在、岩手県でタチウオ等、南方系の魚が増えております。タチウオについては、今年度、宮城県の方に視察に行つて参りまして、今年からタチウオの試験操業を実施することとしております。また、タチウオの成分分析等も行うこととしております。</p> <p>サワラも増えており、サワラについては、鮮度保持試験を行っております。また、成分分析等も行っております、今後も見据え、色々と試験を行っているところでございます。</p> <p>多くの委員から情報発信というお話もございました。今までは当センターのホームページや年報での公開など、ちょっと余りにも専門的でわかりづらい部分があったかと思っておりますので、来年度からは、Xや Instagram、Facebook 等の SNS でも、試験研究の状況を分かりやすく伝えていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。</p> <p>その他、委員の皆様から、何かございませんでしょうか。 リモート出席の委員から御発言がある場合は、挙手ボタンを押してください。</p> <p>それでは、御意見ないようでございますので、以上をもちまして、第 63 回岩手県水産審議会の議事を終了いたします。 議事進行への御協力、誠にありがとうございました。 それでは、進行を事務局にお返しします。</p>
-------------------------	--

閉会挨拶

<p>森山 水産担当技監 心得兼水産振 興課総括課長</p>	<p>閉会に当たりまして大井会長はじめ、委員の皆様方、令和 2 年 9 月以降の就任期間中、本県の水産業施策に関する貴重な御意見、御提案をいただいたところでありまして、改めて御礼を申し上げます。</p> <p>海洋環境の変化等により水産業は常に厳しい状況でございますけれども、県といたしましても、皆様の御意見等をサポートしながら、引き続き、水産関係団体と一体となつて、水産業の振興に全力で尽くして参りたいと考えておりますので、今後とも御協力、御支援をよろしくお願いいたします。</p> <p>本日は大変ありがとうございました。</p>
<p>平嶋 特命課長 （進行）</p>	<p>これもちまして、第 63 回岩手県水産審議会を閉会いたします。 本日は誠にありがとうございました。</p>

閉会